

校歌制定の経緯

顧問 室田 弘

～はじめに～

平成3年9月26日のことでした。私はかねてより一度はお伺いをして直接お話を聞かせていただければと思っていた五城目町在住の今村久吉郎さんのお宅にお邪魔する機会を得ることができました。この日同行の労をとってくださったのは、これも五城目町に住んでおられる越後市朗氏（本校20年卒）であります。ところで、今村さんはすでに90歳一、まことに老翁の域に達している御高齢であります。ところが、元気矍鑠（かくしゃく）、しかもその記憶力の確かさには感動させられました。私が是非とも今村さんにお目にかかりたかったというのは、氏が、本校校歌の制定に当たって、その作詞の依頼を直接、土井晩翠氏になされた方であるということを知っていたからであります。

当日、聞かせていただいた貴重なお話はこのあとで紹介いたしますが、その今村さんの御経歴についても簡単に触れておくことにします。今村さんが旧制の秋田中学を卒業されたのは大正10年。その後、旧制二高（仙台）に入学、さらに京都大学医学部へと進まれ、京都病院勤務を経て、京都市衛生局長などを歴任、御退職後は郷里の五城目町に帰られ、ここで80歳過ぎまで保健所長として御活躍。当時、九十翁の域にあつて悠々自適の生活を送っておられる方であります。

～「校歌制定」にゆかりの深かった人々～

始めに、本校創立百周年記念誌の中から校歌制定にまつわる記述（「大正編」196頁）の一部を原文のまま引用することから話を進めます。

以前から校歌制定の必要性が在校生の間で叫ばれていたが、創立50年を目前にした大正11年7月15日、秋田中学校校歌は、土井晩翠作詞、梁田貞作曲によって制定され、同年9月1日、創立50年記念日に発表された。

作詞者選定にあたって、職員間で相馬御風、土井晩翠などいろいろな人物が挙げられたが、古村精一郎（現同窓会長）の二高（現東北大学）時代の恩師土井晩翠にお願いすることになった。その当時の二高在学中の今村久吉郎（京都市衛生局長）が連絡の衝にあたったといわれる。

この文章の中に出てくる古村精一郎氏については、私達にとって同窓の大先輩であるばかりでなく、氏を秋田中学時代での恩師と仰いで、その薫陶を受けられた方もたくさんおられますから、私から敢えて御紹介するには及ばないようにも思いますが、ここでは若い同窓の方々のためにもその概略だけを述べさせていただきます。

古村先生は、明治43年旧制秋田中学校を卒業後、同じく旧制の二高（仙台）に進まれ、ここで英文学教授として活躍中の土井晩翠氏の講義を受けられ、氏に心酔されたということです。その後、大正5年から昭和9年までは母校である秋田中学校の教諭・教頭として長年にわたって教鞭をとられておりますが、本校創立60周年記念の「校友会歌」の作詞者としてばかりでなく、同窓会の第2代会長としても長い間母校のために心を尽くされた方として同窓緒氏の間では忘れることのできない先生のお一人であります。

ところで、古村先生が二高時代に教え受けた土井晩翠氏は、「荒城の月」の作詞など、

詩人として、また英文学者としてあまりに有名であります。明治4年に仙台市に生まれ、二高から東大英文学科、さらに大学院へと進み、卒業後は母校である二高の教授・東北大学の講師として活躍されました。戦後、仙台市の名誉市民に推挙され、また、詩人としては日本ではじめての文化勲章を授与された方ということでもよく知られております。

～今村翁のお話～

今村きんのお話によりますと、今村氏が二高に入学した春、秋中時代の恩師である古村先生から、秋田中学校の「校歌」の歌詞を土井晩翠氏につくってもらおうよう依頼されたとのことでもあります。そこで秋中卒業の二高の学生であった今村氏、元の能代市長柳谷清三郎氏など4名の学生で、夏休み前のある日、二高教授であった晩翠氏の自宅を訪ね、直接校歌の作詞をお願いしたのであります。

晩翠氏は、学生である今村さんたちの突然の訪問にもかかわらず、この依頼を快く引き受けられ、秋田市周辺の景観、高い山は何か、大きい川は何か、また、郷土の偉人は誰かなどと尋ねられ、その時に答えた「太平山」「雄物川」、「平田篤胤」「佐藤信淵」などという言葉は、そのまま歌詞の中に採り入れられることになったのだそうである。

晩翠氏は、この校歌を作るに当たって秋田まで足を運ぶということはなかったようですが、それでも秋田中学が、当時すでに秋田県を代表する名門校であり、優れた人材を数多く輩出している学校であることは十分に念頭に入れて作詞に当たったように思われたとのことでもあります。

以上が、本校の校歌ができるまでの概要であります。今村さんは、このときお訪ねした晩翠氏の自宅の様子や、今村さんたちをもてなしてくれた独特な雰囲気は今でも忘れられないと言って懐かしがっておられました。晩翠氏の御自宅は、いわゆる純和風の瀟洒なたたずまいで、お部屋の中には当時としては珍しい扇風機などもそなえられ、また夏の日のおもてなしということもあったのでしょうが、グラスにそそがれた透明な砂糖水に氷片を浮かべたものをご馳走になったということでもあります。まだ大正の十年代、砂糖水でさえお洒落なお飲み物に思えた上に、一般の家庭でどのようにして氷を貯えておられるのか、今村さん達学生は、不思議な気分を味わいながら晩翠先生のお宅をあとにされたとのことでした。

～おわりに～

この度、今村さんからお伺いすることのできた校歌ができるまでの貴重な逸話を、このようなつたない文章ではありますが、何とかまとめ挙げることができました。今村翁には心から感謝申し上げたいと思います。間もなく秋田高校も創立150周年を迎えることとなりますが、私達は同窓のきずなを「校友会歌」で確かめ合い、「校歌」の一節を口ずさむことで、秋田中学・秋田高校をわが母校と呼ぶことのできる誇りと喜びとを幾たびとなく呼び覚ましてきました。かつての秋田中学に、古村精一郎先生がおられ、その教え子として今村久吉郎氏がおられ、お二人の二高時代の恩師として土井晩翠氏がおられて、秋田高校には誇るに足るべく「校歌」が残されました。この僥倖にも心から感謝しながら稿を閉じさせていただきます。

(元校長、平成4年1月20日発行「秋高同窓だより第36号」掲載記事に加筆修正。平成29年3月24日)